「茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」に登場する動植物についての考察

岸　一弘*

1　はじめに

「茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」は，昭和３年(1928 年) 1 月に茅ヶ崎町立鶴嶺尋常高等小学校(現鶴嶺小学校)により手書き原稿としてまとめられ，昭和 51 年(1976 年)に茅ヶ崎市文化資料館の「資料館叢書２」として刊行されたものである。

本書には，はぜ(沙魚)，しゞみ(蜆)，ぼら，えび，鯉，どじょう，鮒，なまず，うなぎ，かに，まつむし，ぎよ(ぎーす)，きりぎりす，くつわむし，蝉，螢，とんぼ，えんまこおろぎ，てんとう虫だまし，夜盗虫，がん，がも，葦，真菰，茅(チガヤ)といった動植物が記載されており，昭和初期の茅ヶ崎南西部(西久保～柳島)における生物相の一端を知ることができる。

当誌に記載されている動植物の中からいくつかの種類を取り上げ，生態学，形態学等の観点からの考察を試みてみたい。

本稿をまとめるにあたり，文献等の便宜を図っていただいた茅ヶ崎市文化生涯学習課の平山孝通氏，茅ヶ崎市文化資料館の須藤　格氏に感謝申し上げる。

2　動物

1)「しゞみ」

「柳島の沼地に多く棲む。潮の満干が関係して殊に味が良い。」と書かれていることから，汽水性のヤマトシジミを指していることは明らかである。

現在も多摩川の河口域では健在であるが，相模川は河口干潟が消失し，近年市内での報告例もない。

2)「鯉」

野生型は大河川や湖沼に生息するとされており，現在小出川で見られるコイはほとんど飼育型(放流された個体)である。本誌では，「柳島のだぶ，浄林寺の池は鯉の棲む場所であれども出ると盛んに釣にかゝるものであるが…」と書かれており，当時は小出川下流部において野生のマゴイが生息していた可能性があることを伺わせる。

「河川の改修や深い淵がなくなったので，今は甚だ少ないが」とも書かれており，この当時すでに河川環境の悪化が起きていたことも分かる。なお，小出川の河川改修は大正 13 年(1924 年)に行われている。

3)「鮒」

「河川の改修された為に鮒も減った。…護岸がコンクリートに変わって水の淀む場所もないので…」と書かれており，コイと同様にフナ(ギンブナなど)も河川改修の影響を受けて減少したようである。

4)「かに」

『…水の深い所には掌大のかにがいる。食用にとる。水がには潰して「もじり」の餌にする。』と記されている。「掌大のかに」は、大きさと「食用にとる」という記述からモクズガニを指していることは間違いないが，「水がに」が何を指すのか不明である。

5)「まつむし」

『海浜の砂山叢の中に秋の夜を「チンチンチロリン」と鳴き明かす。』と書かれており，海岸砂丘地にマツムシが生息していたことが伺える。飯島(1963)にも，海岸付近に本種の生息地があったことを推測させる記述が見られる。

「鈴虫はこの辺にはいない」と書かれているが，岸(2007)によれば，2003 年に下町屋一丁目，2004 年に相模川河川敷(萩園埋田)でスズムシの生息が確認されており，局所的であったにせよ，当時鶴嶺地区にスズムシが生息していた可能性は高い。

6)「ぎよ(ぎーす)」

『夏の熱い日の中，草の上で「ギーイチョン」と鳴いている。』と書かれているので，キリギリス(ヒガシキリギリス)を指していることは明らかである。

7)「きりぎりす」

『初夏の頃，竹藪等で「キリキリキリ」と鳴く。他の虫より早く耳にするので飼われもするが，「ぎよ」よりは愛嬌がない。』と書かれているので，明らかにヤブキリのことを指している。名称の混乱はあるが，当時においてもキリギリスとヤブキリを明確に区別していたことがわかる。

ヤブキリ♀(2011年8月14日,茅ヶ崎市赤羽根十三図で撮影)

8)「くつわむし」

本種は，現在市内南部では相模川河川敷(萩園)に少数が生息するだけとなってしまったが，当時は本種の生息に好適なブッシュ環境が各所に見られたことが推測される。

9)「蝉」

「チイチイと小蝉が五月頃から焼けつくように鳴く…」とあるのは鳴き声からニイニイゼミを指しているのは明らかであるが，ニイニイゼミは6月下旬から出現する種類なので，出現時期の記述誤りと思われる。

10)「螢」

「五月頃からぽつぽつ目に就くが六月中頃が盛りであろう。」との記述からすると該当する種類はゲンジボタルとなるが，「萩園，円蔵，矢畑等の耕地には発生する…」と書かれており，生息環境から考えるとヘイケボタルの可能性が高い。ニイニイゼミと同様に出現時期の記載を間違えた可能性もある。

11)「てんとう虫だまし」

「…鞘体は稍半球形をなす。全体暗赤褐色を呈し翅鞘に二十八の黒点を有す。…茄子，馬鈴薯等の農作物に大害を与う。」との形態・生態に関する記述から，ニジュウヤホシテントウ類であることは明らかである。今でもニジュウヤホシテントウ類をテントウムシダマシ類と俗称する例があるが，ニジュウヤホシテントウ類はテントウムシ科の昆虫である。

12)「がん，がも」

「がも」はカモの誤記であろう。現在神奈川県にガン類が渡来することは極めて稀であるが，当時，茅ヶ崎市内でもガン類が見られたのであろうか。

3　植物

1)「茅　チガヤ」

「茅は禾本科に属して主に海浜の丘陵及び山野に叢生する多年生の草本で…」と書かれており，海岸地域から丘陵地まで広く分布していたことがわかる。また，「茅ヶ崎の名に負う茅の里はそも何処であろう。」との記述がある。「茅ヶ崎の名の由来はチガヤではないか」という話を聞くが，その根拠が本誌であるのかもしれない。

海岸に自生するフシゲチガヤ(2010年5月9日,茅ヶ崎市柳島で撮影)

参考文献

飯島小平，1963．柳田のおじさんの思い出．定本柳田國男集第12巻月報.筑摩書房.

岸　一弘，2007．茅ヶ崎・藤沢の直翅類4．文化資料館報告,(15):15-35.

鶴嶺小学校編，1976．茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌．資料館叢書,(2):22-24．茅ヶ崎市文化資料館.

*茅ヶ崎野外自然史博物館